

# ひきこもり 癒やししの寺

北九州市小倉北区の宝樹寺が毎月2回、寺の本堂を開放し、「ひきこもり」の人たちを受け入れていく。「時間がゆったりと流れるお寺を家以外の居場所にしてほしい」。住職の林義淳さん(43)が「Cafe★Tera」と名付けた活動は、11月で丸6年を迎える。参加者は寺での穏やかな交流を通じて、社会参加への自信を少しずつ取り戻し、前を向いて動き出すようとしている。

(手嶋由梨)

本堂には9月上旬、20代の男女12人が集まっていた。茶と菓子を囲みながら、趣味の話をしたり、寝転がったりと、過ごし方は自由だ。

3年前から通う女性(34)は、中学時代に受けたいじめのため、家にこもる生活が長く続いた。一時は体重が20kg台まで減ったという。でも、寺での交流を通して本来の明るさを取り戻し、今では参加者たちの世話役になっている。「誰かに心境を聞いてもらうだけで楽になる。今が第二の青

春です」とほほ笑む。小倉北区の安森邦晴さん(34)も「以前は外出するの怖かったが、自信がつき、頑張ろうと思えるようになった」。参加するうちに、自らも「人を癒やしたい」との思いが募り、同寺に勤めるようになった。

「お寺にはくつろげる雰囲気がある。気構えずに過ごしてほしい」。林さんもTシャツにジーンズ姿で参加者を迎え、会話を楽しむ。いじめによる不登校、心の病、仕事での挫折……。様々な事情を抱える中、林

## 北九州の交流会 来月で6年

### 社会参加へ後押し



本堂で談笑する若者たち  
(北九州市小倉北区の宝樹寺で)

さんがさりげなく話しかけたり、共通の趣味が見つかったりして会話が生まれると、参加者の表情が柔らかくなるという。

「自分も若い頃、生きる目標を見失ったことがあった」と語る林さん。寺を継ぐという敷かれたレール通り8年に始めた「Cafe★Tera」の当初の参加者

りの将来に抵抗があり、ふさぎ込むことも多かったという。しかし寺を継いだ後は、自ら悩み続けた経験を踏まえ、「生きづらさを感じている人を支えたい」と思うようになった。2008年に始めた「Cafe★Tera」の当初の参加者

は数人程度だったが、評判が広がり、今では毎回10人以上が集う。

林さんは、北九州市が設けた「ひきこもり地域支援センター」(戸畑区)を運営するNPO法人「STEP・北九州」の理事も務める。

「人が家から出られなくなるのは、世間のスピードに歩調を合わせるのが少ししんどくなっただけ。寺でゆっくりと活力を養い、社会へ羽ばたいてほしい」。林さんは、そう願っている。

「Cafe★Tera」では毎月1回、インターネットラジオ番組を収録。寺のホームページ(<http://homepage2.nifty.com/houjin/>)で配信し、参加者のさくばらんな会話を紹介している。

内閣府の調査では、家や自室に閉じこもって外に出ない「ひきこもり」の若者(15~39歳)は全国で70万人(2010年)に上ると推計される。

NPO法人「全国引きこもりKHJ親の会」(東京)によると、2002年に27歳だった平均年齢は、今年は33歳に上昇。ひきこもりの期間も長期化する傾向にあり、平均で約10年。1割近くが20年以上という。

同会福岡「楠の会」(福岡市)の事務局を務める吉村文恵さん(74)は「行政による就労支援はあるが、ひきこもりに苦しんでいる多くの人たちに段階に行くことは難しい」と指摘。「金縛り状態、の心を、ゆっくりと少し

ずつほどいていく支援が地域に広まってほしい」と、林さんの取り組みに期待している。

### 全国に70万人、平均年齢上昇